
哀 LOVE ストーリー

はっぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀 LOVE ストーリー

【Nコード】

N0811B

【作者名】

はっぴ

【あらすじ】

哀の初恋の続編です♪哀の初恋から読んでもらえると嬉しいです♪
♪ 哀ちゃんのLOVEストーリーです！！哀ちゃんは、自分の気持ちを「彼」に伝えることができるのでしょうか！？

プロローグ

私は、彼に恋をした

私の初恋の人……………

そう…江戸川コナン

工藤新一ではなく、江戸川コナンに 恋をした

でも、彼には蘭さんがいる

彼も蘭さんのことが好き…

それは痛いほど、よく分かってる

でも、それでも、

好き……

彼のが好き

優しくて、いつも私を助けてくれて、励ましてくれる

そんな彼のが、とても…とても好き

ずっと一緒にいたい…

もし……もし解毒剤がなかったら…彼は元に戻ることはできない
そうすれば……

ダメ

彼には幸せになってほしいんだもの

私の作った薬のせいで彼は……

だから、幸せになってほしいの…

好きで好きで……たまらないけど

私の初恋だったけど

この恋は実らない…

私が彼に出来ること、それは解毒剤を完成させること

だけど……

彼が……江戸川コナンが工藤新一にもどるまでは

恋をしていても、いいわよね

私は、灰原哀は…江戸川コナン…あなたのことが好き…です

プロローグ（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます

哀の初恋の続編版、まだプロローグですがどうですか？

まだまだ未熟ですので、アドバイスや感想をよろしくお願いします
！！

青空

キンコンカーンコーン
チャイムの音が、学校中に鳴り響く

歩美 「コナンくん、哀ちゃん、一緒に帰ろう」
哀 「ええ、いいわよ」

コナン「いいよ」

元太 「んじゃあ、はやく帰ってみんなでサッカーしよーぜっ!!」

光彦 「賛成です!こんなに気持ちの良い天気なんですから!遊ばないと損ですよ」

歩美 「歩美も賛成!」

少年探偵団の5人はいつものように帰り道を歩きながら話していた。
前には 歩美 光彦 元太 後ろには コナン 灰原 が歩いている

歩美 「コナン君と哀ちゃんもやるよね?」

コナン「えっああ、俺は今日はちよつと」

元太 「や・る・よ・なっ!!!!」

光彦 「喜んでやりますよね!!」

歩美 「コナン君、やらないのお」

歩美は今にも泣きそうな顔で言う

コナン「だったから……はあゝわあたよ」

歩美・光彦・元太「やったあ」

コナンも3人の迫力にはかなわなかった

それにここで歩美に泣かれたら大変なことになる
そう予想したのだろう…

哀 「クスクスッ…」

コナン 「なっ…笑ってんじゃねーよ」

哀 「別にいいじゃない…人の勝手でしょっ」

コナン 「オ、オメエーそんな性格じゃ、一生モテねーぞ」

哀 「えっ……」

コナン 「…ん？」

「オメエーそんな性格じゃ一生モテねーぞ」

その、彼の言葉が頭の中でぐるぐるまわっている

「一生モテねーぞ」

「一生モテねーぞ」

「一生

モテねーぞ」

彼が冗談で言ったことは分かっている

でも、私が好きな彼に…そう言われると少し、少し切なくなる
ああ、彼は私のことそういう対象では見てないのよねって…（そ
ういう対象↓好きという対象のこと）

歩美 「哀ちゃん？哀ちゃん」

哀 「えっ…な、何？吉田さん」

歩美 「…うん。今日、哀ちゃんもサッカーやる？」

元太 「やろーぜ！灰原」

光彦 「きつと気持ち良いですよっ」

哀 「そうね、でもゴメンなさい。今日はやめておくわ」

歩美・光彦・元太 「えっ…なんで？」

哀 「ちよつと調べたいことがあるの」

歩美 「そっかぁーじゃっ今度ねっ」

哀 「ええ」

元太 「約束だぞっ！」

哀 「分かったわ」

そして3人は話しを仮面ヤイバーのことに変え、楽しそうに話しながら前を歩いていった

後ろではコナンが灰原のほう見て、話し始めた

コナン 「たくっ…俺のときはムリヤリにでもサッカーに入れようとしたのに、なんで灰原は簡単に…」

哀 「しょうがないじゃない…女の子だもの」

コナン 「えっ…」

コナンは哀からはあまり聞かないようなことを言い、一瞬驚いていたがすぐにまた灰原のほうを向き、話を変えた

コナン 「そーいやオメエ、調べるって何を調べんだよ!？」

哀 「自分の気持ち…」

コナン 「は?……」

哀 「あなたは、どう思っているのかしら?」

コナン 「は?...何が?？」

哀 「江戸川君には一生分からないかもね」

哀はクスツと笑いながら言った

そんな哀を見て不機嫌そうに哀に言う

コナン 「それってどういう意味だよ」

哀 「あなたは、鈍いから…」

コナン 「???……」

コナンは分からないまま、2人はそのまま何も話しをせずに歩いていった

そして、歩美 光彦 元太との分かれ道

歩美 「じゃあコナン君、3時に公園で待ち合わせネ♪」

コナン 「ああ！」

元太 「遅れんじゃねーぞ」

コナン 「元太もな」

光彦 「そうですよ元太君！」

元太 「俺はぜってえ遅れねーよ！もし遅れたらお菓子おごってやるヨ！」

歩美 「あつ元太君、今の約束だよぉ」

元太 「もっちらんさ」

元太は自信ありげに腕くんで言った

哀 「小嶋君、遅れないことね」

元太 「おうよ！」

コナン 「遅れたらマジでおごってもらうからな！」

元太 「ああイイゼツ」

歩美 「それじゃあ後でね、コナン君 またねっ哀ちゃん」

光彦 「また明日！」

元太 「まつたなあゝ」

哀 「ええ」

コナン 「あとでなー」

コナン達は互いに手を振りながら話し、自分達の家への道を歩いていった

コナン 「ふうー…たくつ 元気なヤツらだぜ…元気すぎるんだよなあ」

哀 「クスツ…あなたもそうだったんじゃない？！あの子達ぐらいのときは」

コナン 「…〃〃〃なつ、俺は…灰原はどうなんだよ」

哀 「…さあね…そんな昔のことなんて、覚えてないわ」

哀は青空を見上げながら言った

コナン 「ふうん…」

そう言いながら、コナンも青空を見上げた

歩美 光彦 元太 の言うとおり

今日は雲一つない 青空が空一面に 広がっていた

青空（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます

どうだったでしょうか？

次回、元太君は遅れずに公園にくるのでしょうか？！

って…ここがメインじゃないんですけどネ♪

○○○○○○↑名前です。

ほぼお分かりでしょうか？あの子が○○○○にやってきました♪

オレンジ色の飴

P M 2 時 5 0 分

子供達が楽しそうにワイワイと遊んでいる公園

ベンチには3人の子供が座っていた

吉田歩美 円谷光彦 江戸川コナン

この3人がベンチに座っている

もうすぐ、待ち合わせの時間になるため、余裕を持ってやってきた
3人

だが1人はまだ来ない…小嶋元太だ

まあ、まだあと10分もあるのだが…

歩美 「元太君、まだかなあ」

光彦 「もう、待ちくたびれちゃいましたよ…」

コナン 「しょうがねーよ、俺達がはやかっただ。まだあと10分あるし」

歩美 「うん、そうだね」

光彦 「そうですね！サッカーボールもあることですし、先に遊んでましようよ！」

歩美 「賛成ー！」

歩美は手を思いつきりのばしながら言った

コナン 「ああ、そうだな」

「それじゃあ、私もいれてもらおうかしら」

コナン 「えっ……」

歩美 「哀ちゃん！」

光彦 「灰原さん！」

コナンの横からひょこつと現れたのは哀だった

コナン 「おい、灰原！今日は博士ン家で……」

哀 「別に良いでしょう……気が変わったの」

コナン 「気が変わったってなあゝ」

哀 「いいじゃない！それに、小嶋君が遅れてくるかどうかも
気になるし……」

歩美 「歩美、何おごつてもらおうかなゝ」

光彦 「僕は、スナック系のお菓子がいいです！」

歩美と光彦は、もう元太が遅れてきたときのこと話している
いや……もう予想しているのかもしれない

元太君は遅れてくる……！と

コナン 「……気はえーな」

哀 「私は飴がいいわ」

コナン 「んー俺も飴にすっかな」

歩美 「決めた！歩美チョコレートにするゝ」

光彦 「僕はポテトチップスにします！」

哀 「あら……そうこうしているうちに、もう3時になるわよ」

哀が時計のほうを向いて言い、3人も時計をみあげる

歩美 光彦「2時59分！」

コナン 「今回は元太、おごることになるな」

哀 「さあどうかしら？分からないわよ。あと一秒ってところで来るかもしれないわ」

コナン 「それは奇跡だな」

哀 「あら、なら奇跡が起こっちゃうかもね……」

コナン 「あんなあー……」

歩美 「30」

光彦 「29」

歩美 「28」

光彦 「27」

歩美と光彦はカウントダウンを始める

コナンと哀も一緒にカウントダウンを始めた

歩美 「残り……10秒♪」

光彦 「9」

哀 「8」

コナン 「7」

歩美 「6！」

光彦 「5！」

哀 「4」

コナン 「3♪」

歩美 「2……」

光彦 「1……」

歩美 光彦 コナン 哀 「○—————!!!」

最後は力強く言う

よほど嬉しいのだらう、お菓子をおごってもらえるのが♪

ダダダダッ
ッッッッ！！！！

ダッシュで公園に入ってきて、コナン達の前で止まる

「ゼーハー…セ…セーフか？」

コナン 「残念だったな元太」

「アウトです！」

「ええええええええええええええええええ！」

元太の聲が公園中に響く

一瞬公園で遊んでいるみんなが元太を注目したようだった。だがすぐにまた遊び始める。

そして、近くにある駄菓子屋に向かう

しぶしぶと一番後ろをついていく元太と、ルンルン気分で一番前を歩く歩美と光彦

そして真ん中で歩いているのがコナンと哀

哀 「まさか、本当に遅れてくるだなんて…」

コナン 「なっ言ったる！残り一秒のところで来るなんて奇跡だよ！き・せ・き！」

哀 「そうね…私とあなたも、奇跡が起これば…」

コナン 「へ？」

哀 「あつ…なんでもないわ」

私とあなたも、奇跡が起こればずっと一緒にいることができるのかしら？

ずっと…ずっと一緒に

コナン 「おい灰原！？どうしたんだよ、大丈夫か？」

彼が心配してくれている…

哀 「ええ、なんでもないわ。大丈夫よ」

そして、駄菓子屋に到着

順々にお店の中に入っていく

そして、コナンと哀も続いて入っていく

歩美 「歩美、やつぱりこっちにしようかな」

光彦 「僕もポテトチップスはやめます！僕はどれがいいですかね？」

また悩みだした歩美と光彦

長くなりそうだ……

コナンと哀は飴コーナーへ行く

コナンと哀の前には、色んな色の飴がたくさん箱につまっている

ピンクやキイロ、ミドリやシロなど色さまざまだ

コナン（どれにすっかな…よしこれにするか）

哀（のど飴ってあるかしら）

頭の中で考えながら、2人ともオレンジ色の飴に手をのばす

コナン 哀「あっ…」

2人の手と手が触れる

コナン 「悪い…はい、飴」

コナンはオレンジ色の飴を手にとって哀にわたす

哀 「あ…ありがとう」

哀はそつとコナンの手から飴を受け取る

コナン「オレンジ色の飴…もうねえな、んじゃっ俺は水色の飴にするよっ」

コナンは笑顔で哀に言った

哀 「ええ」

哀も笑顔でコナンに答える

ドキドキ……ドキドキ…

今頃、ドキドキしてる

元太がみんなの分のお菓子買い、わたす

哀はそつとオレンジ色の飴をポケットにしまう

コナン 「ん？灰原オメエー、飴食べねーのか？」

哀 「えっ…ええ」

コナン 「ふーん」

哀 「この飴は、私の宝物なのよ」

コナン 「は？」

私の大切な大切な宝物

彼と気が合った瞬間

同じ飴を選んだのよ、それだけでもすごく嬉しいの
だから、私の大切な大切な宝物

大切な大切な

宝物

。
。
。
。
。

オレンジ色の飴（後書き）

今回も、ありがとうございます♪

なんか、最初の部分はLOVEじゃないところが多かったですね…。

それに、ちよつとゴチャゴチャしてるような気も……

では、哀ちゃんの気持ちをもっと入れて、第三話を書いていきたい
と思います!!

アドバイス&感想もヨロシクお願いします！

小さな箱

ここは、阿笠低

そしてここは、とある一室…地下室

1人の少女がパソコンの前にすわり、カチャカチャと音をたてながらパソコンのキーを打っている

哀「ふうー…今日はここまでにしようかしら」

そう言つて、哀はパソコンの電源を切った

今日は、解毒剤の研究を何時間もしていたのだ

もちろん、今日は学校は休み 日曜日なのだから

哀は頭の中に1人の少年の顔を浮かべる

江戸川コナン

フツと笑い、机の上にある小さな箱を開ける

中には…オレンジ色の飴が入っている

本当に宝物にしているのだ

オレンジ色の飴を手に取り、ベッドに座った

哀「江戸川君……」

哀はそつと小声で呟いた

大好きな彼に振り向いてほしい……いつもそう願っている

彼は鈍いから、私の気持ちなんて気づかない

それなら、私から告白するしかない

でも、そんな勇氣はない

相談する人もいない……

哀「私は一体どうすればいいのかしら？」

とまた呟く

部屋に自分の声が響き渡る

哀「はぁー……」

ため息をついて、ベッドに横になる

そのまま哀は、寝息をたてながら眠ってしまった

哀がスースーと眠っているころ、阿笠低には1人の客人が来ていた

博士 「おお！新一かぁ」

コナンはニッと笑って言った

コナン「灰原はいるか？」

博士 「おお、地下室におるぞ」

コナン「サンキュー、じゃっあがらせてもらっよ」

そう言って阿笠低にあがっていった

コンコン コンコン コンコン

地下室のドアから聞こえる音…コンコン コンコン

コナン「おい、灰原ゝ入るぞー」

そう言ってコナンはそっと地下室のドアを開けた

コナン「灰原ゝ？…あっ」

ベットには今もまだ、哀が寝息をたてて寝ている

コナン「寝てんじゃないか」

コナンはそう呟くと、ベッドの上にある毛布をとって哀にかけた

コナン「たくっ…風邪ひくぞ…ん？」

コナンの目に入っただのは、哀の手の平にのっている、オレンジ色の飴

コナン「こいつ、本当に宝物にしてんのか…??」

そうして、コナンはそつと部屋を出て行った

博士「新一く哀君はまだ研究しとったか？」

コナン「いや、ベッドの上で寝息をたてて、気持ち良さそうに寝てたよ」

博士「そうじゃったか…哀君に何か用事があったのか？」

コナン「ん？ああ、別にたいしたことじゃねーんだけどな」

博士「そうか」

コナン「んじゃあ、俺もう帰るよ」

博士「えっもう帰るのか？」

コナン「ああ、灰原は寝てるしな」

そう言いながらコナンは玄関のほうへと向かって行った

コナン「んじゃ、またな博士」

博士「哀君が起きたら、電話しようか？」

コナン「いいよ、明日聞く。たいしたことじゃねえって言っただろ！」

博士「そうじゃったな」

コナン「またな、博士」

そう言ってコナンは阿笠邸から出て行った

コナンが帰ってから、一体何時間がたっただろう……

哀は目を覚ました

哀「ん？あら、寝ちゃっていたみたいね……ん？」

哀は自分にかけてある毛布に目をやった

哀「私、毛布なんてかけたかしら？」

少しして、きつと博士がかけてくれたんだと思い、地下室から出て行った

哀 「博士」

博士「おお哀君、起きたか」

哀 「毛布、かけてくれてありがとう」

そっいいながら、カップにコーヒーをそそいで椅子に座った

博士「毛布？わしはかけとらんよ？」

哀 「えっでも、私が起きたときには毛布が…」

そっ言つてコーヒーを口に運ぶ

博士「ああ、ならきつと新一じゃよ」

哀 「!!!!!!!!!!」

哀は飲んでいたカップを落としそうになった

哀 「くっ、工藤君来たの？」

博士「ああ、何時間か前じゃがのお」

哀 「そっそっ………!!!」

哀はあわてて、自分の服のポケット触つてあわてて地下室に降りていった

博士「おっおい…哀君どうしたんじゃ？」

哀「ない…ない…私の大切なオレンジ色の飴が…」

ベット…毛布の中…床…どこを探しても見つからない

あるのは、机の上にある小さな箱だけ

哀「も…もしかして!？」

博士「哀君？」

博士は心配そうに哀を見つめている

哀は博士のことなど、気にもとめず小さな箱を手を取った

そして、ゆっくりとふたを開いてく…

哀「良かった…」

中にはちゃんとオレンジ色の飴が入っている

哀「でも…どうして?…ん?」

よく見ると、箱の底に白い紙が入っている

それを取り出す

哀「あっ……」

それは手紙だった…彼からの

手紙の内容は、こうだった←

「灰原へ

たくっ、そんなに大切ならちゃんとしまっとけよ！

オレンジ色の飴

それに、はやく食べねーとくさるんじゃないのか！？

まあ、平気ならいいけどさっ

これだけだから

たぶんお前、不思議がるだろ？

誰がこの箱の中に入れたんだって

じゃっまた明日な灰原

江戸川より」

哀「江戸川君…」

哀は心からとても嬉しいという気持ちを感じた

初めての彼からの手紙

工藤君ではなく、江戸川君からの

この手紙も、私の大切な宝物にしよう

そんな様子をずっと見ていた博士が言った

博士「あっ、哀君？」

哀「あっ博士、ゴメンなさい。なんでもないわ、気にしないで」

博士「……?？」

博士は頭にハテナマークをつけたまま地下室を出て行った

そして哀は、オレンジ色の飴と彼からの手紙を箱に大切にしまい、机の上に置いた

寝てしまつ前とは大違いに、哀は本当に心から喜んでいた

哀「明日、彼に会つのが楽しみだわ」

哀は小さな箱を見つめながら、そう呟いた

小さな箱（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます♪

今回のは、どうでしたか？

哀ちゃんの気持ちをドドンと（？）書いてみました。

次回ぐらいから、ちょっと事件でいきたいと思います
さあ、哀ちゃん次回は。。。。されちゃいました。

小鳥とカラス

チュンチュン チュンチュン

小鳥がさえずる、気持ちの良い朝

今日は月曜日

もちろん、学校

通学路には、1人ルンルンと歩いている少女がいた

そう、灰原哀

哀 「〜♪♪」

とても楽しみ…♪

江戸川君と会うのが、どうしてかしら？

と思いながら、少しスキップしながら学校へと向かっている

コナン「灰原、おはよう」

哀 「えっ…江戸川君！…お、おはよう」

緊張してきた…

コナン「今日の灰原、いつもと違うな」

哀 「ど、どうして？」

コナン「後ろから見てたけどさ、ルンルン気分で、少しスキップしてたろ」

哀 「…わ、悪い!？」

コナン「べっ、別に悪いなんて言ってねーよ。いいんじゃないか？

たまには…」

哀 「あらっ優しいのね」

コナン「バツ、バーロー」

と、楽しく会話をしながら歩いていく
あっという間に、学校に到着

教室では、あの3人が待ち構えていた

ガララッ

コナンはドアを勢い良く開ける

歩美 「あつ、コナン君、哀ちゃん おはよう」

光彦 「2人とも、おはようございます」

元太 「オース」

ハイテンションで挨拶をする、歩美 光彦 元太

コナン「おはよう」

哀 「おはよう…朝から元気なのね」

それとはうってかわって、テンション低めの挨拶

歩美 「普通だと思っけど？」

光彦 「コナン君と灰原さん、もう少しテンション上げたほうがいいんじゃないですか？」

コナン「ハハハッ…」

コナン（じゃあ今の俺達は、普通じゃねーってことかよ…）
哀 「クスッ」

コナン「何がおもしろいんだよ…」

哀「別に」

コナン「あっそ」

一時間目 算数

哀「ねえ、江戸川君」

コナン「ん？」

哀「オレンジの飴、しまっておいてくれとありがとう」

コナン「えっ、別に…って言うか、本当に宝物してたとは思わなかったぜ」

哀「クスツ…いいでしょう？別に…それにあなたからの手紙に書いてあったけど…飴はそう簡単にはくさらないわよ。袋だって開けてないんだから、けっこうもつわよ」

コナン「あっそう…」

何げない、おしゃべり

哀にとって、これは幸せな時間だった

哀「そういえば昨日、何しに来たの？」

コナン「ああ、そうだ！！別に本当にたいしたことじゃねーんだけど…」

と言いながら引き出しを開け、一枚のプリントを取り出す

コナン「これ、どう書いたかなって…」

哀「クスクスツ…これね」

このプリントは、水曜日までの宿題になっている

内容はと言うと…

「僕、私のお母さん・お父さんの良いところ
このことについて、作文を書く宿題になっている

水曜日には、授業参観があるのでみんなで発表することになっている

コナン「たくつ…困るんだよな、こういう宿題」

哀「私は書いたわよ」

コナン「えっなんて?!」

哀「…ひみつ」

コナン「たくつ、なんだよ」

哀「クスクスッ…」

ブツブツ言いながらコナンはずっと、プリントとにらめっこしている

そんな様子を哀はずっと見続けていた

そして、そんな哀とコナンを見ている少女がいた……………

キーンコーンカーンコーン

歩美「一緒に帰ろう」

歩美の一言で、みんな一緒に帰っていく
まあ、いつも一緒に帰っているのだが…

いつものように、歩美 光彦 元太は前
後ろにコナンと哀……ではなかった

今日は横一列に5人がならんで歩いていた
通行人の迷惑にはならないのか？

コナン 哀 歩美 光彦 元太 の順で横にならんでいる

そつと小声で、歩美が哀に話しかける

歩美 「あつ、哀ちゃん」

哀 「何？吉田さん」

他の3人には、聞こえていないようだ

歩美 「哀ちゃんってさあ、やっぱりコ……コナン君のこと好きなの
？」

哀 「えっ……もし、そうだったら？」

歩美 「えっ……困るよ、哀ちゃんにはかなわないもんっ」

哀 「クスッ……そんなことないわよ……彼は、江戸川君は私のこと
なんてなんとも思っていないもの……」

哀は、少し頭を下に下げた

歩美 「えっ……じゃあやつぱり哀ちゃんはコナン君のこと、好きな
んだ……」

哀 「さあ、どうかしら？」

歩美 「ええー……どっちなのお」

歩美は思わず大きな声を出してしまい、元太 光彦 が話しに入ろ
うとする

元太 「ん？なんだ、どうしたんだ歩美？」

光彦 「2人で何の話をしていたんですか？僕達も入れてくださいよ」

コナン 「……………」

コナンは何も言わずにただじっと見ているだけだった

歩美 「う、ううん。なんでもないヨねっ、哀ちゃん」

哀 「ええ、これは女の子だけの話なのよ」

光彦 元太 「ふーん」

と言い、並び方はいつもの通りに前に歩美 光彦 元太 後ろにコナン 哀となった

哀 「ねえ、一ついいかしら？」

コナン 「ん？」

哀 「オレンジ色の飴を入れていた箱、どうして分かったの？」

コナン 「ああ、あんなのめれば分かるよ。あんなに…」

哀 「んんっ…」

コナン 「なっ…」

歩美 光彦 元太 「ん？」

歩美 「哀ちゃんっ！！」

哀は、知らない、怪しい男に抱えられている

クロロホルムで、眠らされているようだ

コナン 「灰原！！オメエ…」

誘拐犯 「しー…」

誘拐犯は口到人差し指をあてながら言った

誘拐犯「この可愛い女の子は誘拐させてもらうよ。後で、この女の子の親に電話をさせてもらうよ。お金をもらうためね…」

そう言つて、用意してあつた白の車に哀を抱えたまま乗り、車き発進させていった

ブーーーーー

車は、すぐに見えなくなった

コナン「なっ…くそっ」

歩美「ど、どうしよう…哀ちゃんが」

コナン「まだ予知はある…光彦、警察に電話してくれ」

光彦「は、はい！」

光彦は近くにある公衆電話で警察に連絡した

コナン（くそっ…後ろの存在に気づけなかった…いつもならすぐに…）

光彦「電話しました！警察が今から、博士の家に来るって…」

コナン「よしっ！博士ン家に行くぞ」

光彦 歩美 元太「オーーーーー！！」

阿笠低

博士 「何！哀君が！！警察に電話を…」

元太 「もう光彦が電話したぜ」

歩美 「博士の家に来るって言ってたよ」

光彦 「はい！」

コナン 「博士、今日灰原、探偵バッチ持ってたか？」

博士 「あ、ああ、多分持っていていると思うが…」

ピピッ

コナンは追跡型眼鏡のスイッチを入れる

コナン 「よし、反応がある」

博士 「本当か！」

歩美 「はやく、そこに行こう！」

コナン 「ああ、でも誰か1人ここにのこらねえと…」

光彦 「そうですね、説明する人がいません」

元太 「ええええ！！、俺行きたいぜ！！」

歩美 「歩美も行く！」

光彦 「僕だつて…」

コナン 「あんなあ…」

じゃんけんぽんっ！

最終的には、じゃんけんとなった
負けたのは、元太

コナン「元太、悪いいな！歩美ちゃん、光彦行くぞ！」

歩美「うん！」

光彦「はい！」

博士「お、おい、新…コナン君、警察が来てからにしたほうが」

コナン「んなの、待ってられつかよ！灰原見つけたら電話すつから

そう言いながら、コナンはスケボーをとりだす

コナン「お前ら、振り落とされるなよ…」

歩美「もっちろん！」

光彦「僕だって！体験したことありますし」

コナン「そうだな…歩美ちゃん、本当に気をつけてね」

歩美「うん」

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイ

スケボーのスイッチをふむ

そして……

歩美 光彦 「出発！！」

コナン（オメエら、のんきだな…）

そして、哀のもとへと向かった

向かった先は……米花博物館

カー カー

嫌に、カラスが鳴く

朝の小鳥のさえずりとは、まったく逆だ

カァー カァー

カラスの声は、一体何を暗示しているのだろうか…

カァー カァー カァー カァー カァー

小鳥とカラス（後書き）

ありがとうございます

どうでしたか？

また、コメント&アドバイスをお願いしますネ♪

センチメンタル

コナン「カーブするから、気をつけろ！」

光彦「はい！」

歩美「うん!!」

今は、コナン 歩美 光彦 の3人で米花博物館に向かっている
発信機の反応によると、哀はそこにいるようだ

……あつという間に、米花博物館に到着

コナン「行くぞ」

光彦「はい！」

歩美「う、うん!!」

歩美は、少し緊張ぎみに答えた

発信機の反応を頼りに探していく…

コナン「屋上だ」

発信機の反応は、米花博物館の屋上だった

3人は、急いで階段を駆け上る

ダンッ ダンッ ダンッ ダンッ ダンッ

3人の足跡が響き渡る

ガチャ…

そつと、コナンがドアを開ける

コナン「灰原?!」

歩美「哀ちゃん?」

光彦「灰原さん?」

屋上には誰の姿も見当たらない

灰原の姿も、誘拐犯の姿も…

だが、屋上の真ん中には、小さな物が置いてある

歩美「これ、哀ちゃんの探偵バッジじゃない?」

光彦「えっ…!」

コナン「!」

確かに、それは哀の物だろう…

でも、コナンが気になったのは探偵バッジではない

歩美の足元には、チョークのような物で書かれた文字がある

コナン「これは…」

そう言いながら、コナンは指を文字のところに当てる

コナンの一言に歩美と光彦はコナンのほうに目を向ける

そしてそのまま、コナンが指を置いている方向に目を移す

光彦「も、もしかして…」

歩美「哀ちゃんからの?!」

コナン「おそろくな」

屋上の床に、チョークなような物で書かれた文字は、こう書かれて

いた←

「WEQYD94T、ZB4 6HD、94

AI HAIBARA

あ い う え お

3 E 4 5 6

KETE
」

TASU

文字は、これで終わっている

歩美 「なんだろう？これ」

光彦 「何かの暗号なんだろうか」

コナン 「おそらく、そうだろうな」

歩美 「でも、それならどうして暗号にしたの？普通に書けば良いのに」

光彦 「それは、ダメですよ」

歩美 「えっ、なんで？」

コナン 「犯人に見つかったら、消されてしまう可能性があるだろ。それに、一年生だ。ただのお絵かきとでも思われるだろう」

歩美 「あっそっか」

歩美は納得したように、何度もうんうん と首を縦に振る

光彦 「それよりも、この暗号ですよね」

歩美 「全然、分からないよ」

光彦 「読めるのは…あい はいばら あいうえお たす
けて ですよね？」

歩美 「???」

コナン「あいうえお…3 E 4 5 6…!!!」
歩美 光彦「???」

コナンは、パツと顔を上げ、書かれている文字をノートに写しはじめる

光彦「どうしたんですか?コナン君」

歩美「何か、分かったの?」

コナン「…ああ、分かったよ。全てな」

歩美 光彦「ええええええええ」

コナン「フツ…簡単だよ」

コナンは、ニツと笑ってから、説明をはじめた

コナン「この文字は、パソコンのキーにたとえているんだ。パソコンのキーには、一つのキーに、「あ」と「3」とか「い」と「E」とかって、書いてあるだろ!」

光彦「ああ、そういえば確かに」

歩美「うんうん!」

コナン「それで、文章を読んでいくんだ…」 Q E Q Y D 9 4 T

Z B 4「は、」ていたんしょうがつこう」

「9」は、普通の大きい「よ」だけど、他のていたんし うがつこうとあわせると、「よ」の小さい「よ」になる。

そして、次の「6 H D 9 4」は「おくじょう」そして、「あいはいばら」 「たすけて」

あいうえおと3 E 4 5 6は、このように読めと言ったことだったんだ。

「あ」は「3」 「い」は「E」 「う」は「4」 「え」は「5」 「お」は「6」 ってな…

途中から、ローマ字になっているが、灰原も焦っていたのだろう…」

コナンは一段落つき、ふうーとため息をついた

そして、そんなコナンを見て目を輝かせながら言う

歩美 「すつごおおおい、コナン君！」

光彦 「なるほど、灰原さんは、良くパソコンを使っていましたよね…それですか！」

コナン 「ああ、さっはやく行くぞ！！帝丹小学校、屋上に」

歩美 光彦「オーーーーーー！！！」

コナン（待つてろよ灰原、俺が絶対に助けてやつから…）

コナンの心には、新しい感情がうまれていた

本人は気づいていないようだが…

そして、3人は米花博物館を出て、帝丹小学校へ向かった

そんな頃、阿笠低には警察が到着していた

警察は、目暮警部、高木刑事、佐藤刑事、それと他の刑事の人が来ていた

元太がせつせと説明をしいてる中、阿笠低の電話のベルが部屋中に

鳴り響いた

R R R R R R R R ……

目暮 「阿笠さん、もし犯人だったらできるだけ話をのばして下さい」

博士 「は、はい。分かりました」

部屋には、緊張した空気がただよっている

博士は、そつと電話の受話器を取った

博士 「はい、阿笠ですが…」

誘拐犯「お前のところに住んでいる少女は預かった……身代金のせいきゅうをする……今日の午後、6時に米花博物館前に、一千万円用意しろ」

誘拐犯の声は、機械ごしになっている

博士 「いつ、一千万円!？」

ブチッ

博士の受話器から聞こえるのは、ツー ツー と言う、電話の切れた音だけだった

博士 「今日の午後6時に、米花博物館の前に身代金一千万円を用意しろと…」

目暮 高木 佐藤 「一千万円…」

センチメンタル（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

哀ちゃんからの、暗号の意味分かりましたか？

分かりにくかったら、ゴメンなさい！！

コナン君、実は哀ちゃんにちょっと。。。ですね

これからの2人…ちょっと進展させちゃいます♪

りんご

カー カー カー

午後5時30分

あたりの空は、夕焼けで赤く染まっている
そんな中、カラスは寂しげに鳴く

帝丹小学校 の前

コナン達は、帝丹小学校に到着した
3人は、門の前にたっている

光彦 「さあ、はやく行きましょう!!」

歩美 「うん! そうだね。哀ちゃんが待ってるもん」

コナン 「待て」

と、駆け出そうとする2人をとめる

歩美 光彦 「えっ?!」

同時に首をかしげる

コナン 「歩美ちゃんか光彦、どちらか博士の家に電話してきてくれ
ねーか、灰原はここに監禁されているって。多分、博士の家に警察
はいるだろうし……」

光彦 「はい!」

光彦 「「あっはい、分かりました。今から向かいます」」

数分後

ピンポン

チャイム音が鳴り響く

30秒程たって、博士がドアを開ける

博士 「おお、よく来てくれたのお」

光彦 「いえいえ」

そう言つて、光彦は阿笠低にあがつた

博士が光彦の分のお茶を用意して、テーブルに置いた

目暮 「では、光彦君話してくれるかね」

光彦 「はい」

元太 「おい、光彦！灰原は…」

光彦 「今から、話しますからっ」

元太 「……………」

光彦は、今までの出来事を全て話した

佐藤 「ということは、帝丹小学校の屋上にいるのね」

高木 「では、はやく向かいましょう」

目暮 「そうだな。他の人が中に入ったら危険だ」

光彦 「あ、あの〜」

全員 「ん？」

阿笠低にいる全員が光彦に注目した

光彦 「あの、実は…歩美ちゃんとコナン君が、もう中に…」

目暮 「な、何だと！？はやく、帝丹小学校に向かうぞ！用意しろ」
刑事等 「はっ！」

そして、帝丹小学校へと向かっていった

そんな頃、コナンと歩美は屋上への階段を上っていった

コナン 歩美 「はあ はあ はあ」

屋上は一番上

駆け足で駆け上がっていったので、はあはあと息が切れている

歩美 「キャッ」

コナン 「歩美ちゃん！？」

コナンの少し後ろのほうで、歩美は足をさすっている

歩美 「いったあい…」

コナン 「大丈夫か！？足、くじいたみてえだな…」

歩美 「ゴメンね。コナン君…」

コナン「いいよ」

そう優しく言って、コナンは歩美をお姫様だっこした
顔の色ピンク色に染まっている

歩美「コ、コナン君!？」

コナン「……………」

コナンは何も言わずに下までおり、ベンチの上に歩美を座らせた

コナン「もうすぐ、警察の人達が来ると思っからここでじっとして
ろよ」

歩美「ありがと…コナン君。でも!」

コナン「大丈夫じゃあな」

そっぴい残すと、コナンは屋上に向かって、また階段を駆け上りは
じめた

歩美（コナン君…）

コナン（灰原、今助けてやっからな…）

コナン「はぁ はぁ はぁ はぁ」

最後の一段を上りきる

呼吸を落ち着かせ

一つ、深呼吸をする

コナン「すうー……はぁー」

ガチャ

そして、ドアを開ける

誘拐犯「誰だ！」

哀 「んんんー！」

哀は、手足をロープでぐるぐる巻きにされている
それに、口にガムテープを貼られていて「んん」としかしゃべる
ことができない

けれど、哀の心は嬉しい気持ちでいっぱいだった

哀 （江戸川君…信じていたわ、きっと助けに来てくれるって…）

誘拐犯はコナンの姿を見て、子供と分かるとハッハッハッと笑い出した

誘拐犯「ハッハッハッ…子供かよっ驚かせんなっての」

コナン「なめんじゃねーよ…」

誘拐犯「へ？」

コナンは、キック力増強シューズのスイッチを入れる

カチャ キイイイイイイイイン

シュパッ

サッカーボールも取り出す

コナン「子供だからってなめんじゃねーって……言っただよー！！！」

コナンは、ボールをおもいつきりける
そのボールは、誘拐犯の顔面に直撃！！

………はつきり言つて、痛そうだ…

誘拐犯き、その場に倒れ、気を失っている

コナン「灰原、大丈夫か！？」

コナンは手足のロープをほどき、ガムテープをはがした

哀 「ありがとう、江戸川君。あなたならきつと助けてくれるっ
て…信じていたわ」

コナン「えっああ… ” ” ” ”」

コナンの顔はりんごのように赤く染まっていた

いつもなら、こんなことでは顔は赤く染まらなかった…

りんごのように

赤く

その後、警察が来て犯人は逮捕された

りんご（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます

私、事件の書き方 へたくそ ですな。

スミマセン…… もっとしつかりガンバリマス!!

コナン君、哀ちゃんにチョット ドキッ してます♪

さあさあ、これからどうなっちゃうのでしょうか!?

これからも、よろしく願います

みず色の飴

ドキドキ……

ドキドキ……

あの日から

あの時から

隣にいただけで、ドキドキしている

灰原が隣にいただけで……

なぜ……？

なぜ……？

コナンの頭の中は、疑問でいっぱいだった

哀 「ちょっと、江戸川君」

コナン 「えっ！？」

哀の一言で、現実にはきもどされた

今は、学校からの下校中

歩美 元太 光彦 とは別れ、灰原と2人並んで歩いている

哀 「どうしたのよ、ボーっとしちゃって」

コナン 「えっ……いいやなんでもねーよ」

哀 「そう……あら？顔が真っ赤かよ」

コナン 「えっ、んなことねーよ」

哀 「あら、本当に赤いわよ」

コナン 「……………」

コナンの顔は哀が言うように、本当に真っ赤だった

りん「このように…」

哀 「私に恋でも、しちゃったのかしら？」

コナン 「こっ……恋!？」

コナンの顔は、ますます赤くなってくる

哀 「あら、どうしたの？」

哀はもちろん、「冗談で言っていた

哀 「ねえ、聞いているの?!」

哀の言葉は、コナンの耳には入っていなかった

コナンの頭には、一文字の言葉がグルグルとまわっていた

恋

恋

恋

恋

恋

恋
恋

恋

恋

恋

恋

恋

俺が……灰原に恋??

恋??

そんな…まさかなっ…

そんなことあるわけ……

自分のどこかで叫んでる

恋をしている

お前は恋をしているんだ

と………

本当に

本当に

俺は

俺は

灰原に

恋をしているのか？？

哀 「江戸川君！？」

コナン「えっ」

再び現実にひきもとされる

哀 「本当に大丈夫なの？」

コナン「あ、ああ大丈夫だよ」

哀「本当に？」

コナン「……本当に」

哀「そう…良かった…」

コナン「余計な心配させちまって悪いな」

哀「別に…」

コナン「んじゃ、またな」

哀「ええ、また明日」

そう言って二人は別れ、家のほうへと向かって歩いている

いつもとは違う会話

まったく違う

2人もそれには、気づいていた

でも、気づいていなかったこともある

2人とも……相手に恋をしているということに

気がつかないでいる…

彼は私に恋なんか、していない
するわけがない

アイツが俺に恋するなんて、思えない
するわけがない

と、お互いに思っている

コナンはいつの間にか歩いていた

あの、駄菓子屋に向かって…

そう、元太が遅れてきたため、お菓子をおごってもらった店だ

……哀が、オレンジ色の飴を買ってもらった店

コナンはそこにつくと、中へ入っていく

向かう先は、「飴のコーナー」へと

飴のコーナーにつくと、目の前には前と同じように飴が箱の中にくさんつまっている

そして、一つの飴を手取る

みず色の飴

そう、その飴は、哀と同じ色の飴を選んだため、コナンはみず色の飴を選んで買った……買って

もらったものだった

コナンはその飴を持ってレジに行く

前は、買ってもらった時は、すぐに食べてしまったのだ

店員「10円だよ」

コナン「はい」

コナンは10円をわたして、飴を買う

さすが駄菓子屋

安いものだ

そしてコナンは駄菓子屋から出てくる

その飴は食べずにポケットに入れる

そしてコナンは、ニッと笑う

みず色の飴（後書き）

読んでくださった方、本当にありがとうございます♪

感激です

こんなペースですが、更新させてもらっています♪

多分、一日一話くらいになると思いますが、ヨロシクお願いします
ネ

さくらんぼ

ある朝のこと

哀は、1人で歩いていた

あてもなく

ただひたすら、歩いていた

哀は考えていた

もちろん、彼のことを

トントン

哀 「えっ!？」

突然、肩をたたかれた

驚いて振り向く

蘭 「哀ちゃん、どこい行くの?」

蘭だった

蘭は哀に、笑顔で聞いてくる

哀 「別に…どこにも行かないわ」

哀はそっけなく答えるとまた歩いていく

蘭は哀についていき、話しかける

蘭 「ねえ、哀ちゃん」

哀 「??」

哀は蘭のほうを振り向いた

蘭 「哀ちゃんってさ、コナン君のこと好き？」

哀 「えっ…」

哀の顔はみるみるうちに、赤く染まっていく

そして、蘭はニツと笑うと言った

蘭 「やっぱり」

少し、一分ぐらいの沈黙が続いた

その沈黙を破ったのは、蘭だった

蘭 「哀ちゃんはいいいね」

哀 「えっ?!」

突然話しかけられ、動揺したがすぐに冷静さを保つ

哀 「なんのこと？」

蘭 「哀ちゃんは、好きな人のそばにいられるじゃない」
哀 「……………」

蘭は目に涙をためて話しはじめた

蘭 「新一は今……………新一は今、どこで何をしているんだろうね」
哀 「蘭さん……………」

蘭 「私も…哀ちゃんがコナン君のそばにるように、私も新一のそばにいたいな」

哀 「……………」

蘭 「あつ、ゴメンね哀ちゃん。それじゃあ、マタネ」

そう言つて、蘭は走って行った

哀の頭は、ある一つのことといっぱい、いっぱいだった

哀は蘭の問いに答えることができなかった

その理由は二つある

一つは、蘭にかける言葉が見つからないこと

そして、もう一つは

蘭は、新一が好き 新一は蘭が好きと言つこと

分かっていたはずなのに、今は頭の中のすみっこにいる

でも今は、頭の中にちゃんと入っていった

哀はあらためて思う

私の恋は、実らないんだった…

さくらんぼ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます

今回は、どうだったでしょうか？

まだまだ、下手ですがヨロシクおねがいしますね。

ところで、題名の「さんらんぼ」の意味わかりますか？

さくらんぼは、作者のイメージでは二つくっついてるイメージなんです。

そうすると、さくらんぼは二つついて、一つ

二つで一つと言うことになります。

それを、蘭と新一にたとえてみたんです♪

2人はつりあう確立100%

その蘭と新一を哀とコナンにすると……とまあ、こんな感じの意味です

私、説明下手で……まったく分からなかったら、本当にゴメンなさい！！
それでは、また

紫色の恋

そう、私の恋は実らない

彼はいつか、黒の組織を壊滅させ、薬のデータを手に入れる

そして私が、解毒剤を作る

彼は「江戸川コナン」から「工藤新一」に戻る

彼は幸せに、彼女と生活を送る

幸せに

幸せに

それが一番彼にとって良い選択

私は彼の人生の大半をうばったんだから

それに、今の彼も彼女のが好き

この恋は、絶対にはいけなかった恋だったのよ

でも、私はしてしまったわ

彼に恋を

してしまったわ

好きで好きでたまらない…

いつも守ってくれて、励ましてくれて、私の初恋の人

諦められない…

諦めたくない…

でもこの恋は、実らない

諦めなくちゃ

絶対に

彼にとってもこれが良いのよ…

彼にとっては

私はこれからどうすればいいの？

好き

好き

好き

だけど

この恋は実らない

ものすゝく

ものすゝく

好き

月日がたつていくつれに

どんどん

好きになっ
ていく

江戸川コナンさん

私はあなたに

本気の恋をしました

紫色の恋（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございます♪

短い話でしたけど、どうでしたか？？

哀ちゃん！諦めちゃイヤってのが作者の思いです

これから、ななな、なんと！！

哀ちゃん、決心します

お楽しみに♪

コンペイトウ

哀は、1人で歩いていた

学校へ向かう途中だった

哀の表情はいつもとはまったく違う

悔しそうで、とても悲しそうで…今にも泣きそうな表情をしていた

その原因は、もちろん

江戸川コナン

コナンのことで頭がいっぱいだった

歩美 「ねえ、コナン君、元太君、光彦君」

コナン 「ん？」

元太 「なんだよ、歩美」

光彦 「どうしたんですか？」

ここは、教室

哀は、授業が終わるとどこかに行ってしまった、今はコナン・歩美・光彦・元太の4人である

歩美 「最近、哀ちゃん元気ないよね」

光彦 「あつ、僕もそう思ってた」

元太 「俺も！俺も」

コナン 「確かに…そうだろうな」

光彦 「コナン君、何か知ってますか？」

コナン 「いや…何も」

妙に、コナンの返事がそっけない

そのことには、歩美・光彦・元太の3人も気が付いていた

元太 「なんだよコナン。オメエ、灰原のこと心配じゃないのかよ！？」

コナン 「えっ……」

光彦 「そうですよ！！どうでもいいように…そっけない返事ばかりじゃないですか！」

歩美 「コナン君…」

コナン 「そんなことねえよ…」

コナンは窓の外を眺めながら言った

そんなコナンの前に、元太と光彦が顔だをだしてきた

光彦 「ほらっ！！またそういう返事」

元太 「コナン、ひどいぞ！！」

歩美 「コナン君、哀ちゃんのこと心配じゃないの？」

コナン 「んなわけねーだろっ！心配してるよ…」

コナンはうつむいてしまった

そんな様子を3人はそつと見ていただけで、何も言おうとはしなかった

コナンの雰囲気からして、話しかけることができなかったからだ

コナンはとても哀のことを心配していた

言葉がそつけないのも、そのため

コナンの頭は哀のことで、いっぱいだった

ある日、哀と歩美の2人で遊んでいた

哀は、いつもよりも暗い表情だった

歩美 「ねえ、哀ちゃん」

哀 「何？吉田さん」

歩美 「最近、暗いよ……何かあったの？」

歩美は哀の顔をのぞきこんだ

哀 「まあ、ちよつとね……」

哀は素直にそう言った

ポーカーフェイスを保てそうになかったのだ

歩美 「何があつたの！？歩美に言つてよ！力になるもんっ」

哀 「いいわ……大丈夫よ」

哀はそう言いつつも、歩美は納得いかないと云う顔をして言った

歩美 「ダメダメダメ！！いつもの哀ちゃんに戻つてほしいんだもん……それに、哀ちゃんは歩美の大切な友達なんだもん」

哀 「吉田さん……」

今の哀にはこのような優しさも、ものすごく、優しく感じていた

哀はちよつとは甘えてもいいだろうと思い、コナンと言うことはバ
れないように、上手に上手に話した

哀 「だからね、この恋は実らないのよ……」

歩美 「哀ちゃん……その相手つて、コナン君なんじゃないの？」

哀 「えっ……ち、違うわよ」

歩美 「そんなことないもんっ！好きなら好きつて言つてよ！哀
ちゃん」

哀 「そうね……でも、ゴメンなさいね。それは言えないわ」

歩美は、何も言わなくなってしまった

そして哀も

そんな中、歩美の口が開いた

歩美 「逃げてばっかじゃ…勝てないもんっ！絶対！」
哀 「吉田さん…」

この言葉、歩美の口から聞いたのは2回目

その言葉は、哀の心を動かした

諦める

つまりそれは、逃げるってこと…

逃げたくない

逃げないよ…

絶対に

彼に気持ちを伝えるまでは

絶対に

私は絶対に

逃げない

その日の夜、哀はベランダに出ていた

彼のことを考えながら…

私の気持ち、彼に伝える

逃げずに

吉田さんが言ってくれたんだもの

あの言葉、大切にしなくちゃ

「逃げてばつかじゃ…勝てないもんっ！絶対！！」

告白は、少し勇気がいるけれど

あの言葉を思い出すと心が落ち着いてくる

これなら、大丈夫

きっと彼に伝えられる

この気持ち

私の気持ち

この気持ち

届いて

コンペイトウ（後書き）

読んでくださった方、本当にありがとうございます

えっと、サブタイトルの意味良く分かりませんよね？

あつ、分かる方もいるかもしれませんが、ちよつと説明をさせてい
たきますね♪

コンペイトウと言うのは ズバリ 歩美ちゃんのことです♪

小さな粒も、たくさん集まれば人の心を動かせる と言う意味でこ
のサブタイトルにしてみました

意味が分からない方は、ゴメンなさい。。。。。。

まだ、続きますのでドウゾよろしく願いますネ

スマイル

R R R R R R R R R

毛利探偵事務所の電話のベルが鳴り響く

今は、朝の10時

日曜日

天気は晴れ

とても気持ちの良い朝だった

蘭 「はい。毛利探偵事務所です」

蘭は、受話器を取って電話にでた

哀 「あつ、灰原哀です」

蘭 「あつ！哀ちゃん、コナン君に用事？」

哀 「はい、ちょっと」

蘭 「うん、分かった。今かわるから待っててね」

哀 「はい」

蘭 「コナン君、哀ちゃんから電話」

コナン 「えっ灰原から！？」

コナンはソファで本を読んでいた

もちろん、推理小説の本

哀と言う言葉を聞いたとたんに、電話にでる

コナン「も、もしもし…」

少し、緊張ぎみで答える

その緊張が伝わったのか、哀も緊張していた

哀「え、江戸川君？今からこっちに来てくれない？」

コナン「い、いいけど…なんで？」

哀「そ、それは…」

哀は電話でしゃべりながらも顔が赤くなっていた

隣でコナンとしゃべっているように

哀「ちょ、ちょっと話したいことがあって…」

コナン「分かった…今からそっち行くよ」

哀「ええ」

ここで、電話はSTOPした

コナンはしたくをさっさとすませて、探偵事務所をでる

コナン「蘭ねーちゃん、博士ン家に行ってくるね」

蘭「はい、行ってらっしゃい」

蘭は笑顔で見送りをする

とたんに、コナンの顔にも笑みがこぼれる

コナン 「行ってきますっ」

コナンは、走っていった

ところ変わって、ここは阿笠邸

コナンはまだ来ていない

博士は朝から学会に出かけていて、哀1人だった

哀は決めていた

今日

彼に気持ちを伝える…………と

ドキドキ ドキドキ

一分 二分 と時間がたっていくつれに、ドキドキと胸が高鳴っていく

その度に、哀は思い出す

「逃げてばっかじゃ…勝てないもんっ!!絶対!」

ピンポーン

阿笠低のインターホンが鳴る

哀は直感した

彼だと

ガチャ

哀はゆっくりとドアに向かっていき、ゆっくりとドアをあけた

哀の予想通り、ドアの外にいたのは彼だった

コナン「よお、灰原」

哀「いらっしゃい、あがつて」

コナンは言われるがままに、阿笠低の中に入っていった

哀は、コーヒーを用意する

コナン「あれ？博士は？？」

哀「今日は学会で、朝から出かけているの…」

コナン「そっか……」

コナンは近くの椅子にすわる

哀はコーヒーをコナンのすぐそばのテーブルに置き、向かい側の椅子に座った

コナンはコーヒーを口に入れる

コナン「で、話してなんだよ？」

哀「え……あの」

コナン「??」

コナンは何も言わずに、哀の言葉を待った

哀「……………」
「……じや、なんだから……どこか外に出かけましょ
う」

コナン「あ、ああ」

本当はここで言うつもりだった

静かだし、人に聞こえることもない

でも、哀の口からでた言葉は外に出ることだった

コナンと哀は外に出た

コナン「で、どこに行く？」

哀「ど、どこでもいわよ」

コナン「じゃあ…」

と言ってコナンは哀の手をひっぱり歩いていった

哀「あつ…」

哀の顔はりんご色

哀は彼の後ろ姿しか見えない

けれど、コナンの顔もりんご色に染まっていた

哀は、コナンに追いつこうと少し小走りして隣につく

哀 「ねえ、どこに行くの？」

コナン「着いてからの、お楽しみ」

コナンはいたずらっぽく笑う

そんな顔は、まだりんご色だった

哀も、そんなコナンを見えますすりんご色になっていく

そのまま、2人は歩いていった

2人の顔には、いつの間にか笑みがこぼれていた

スマイル（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます
とうとう、ここまでやってきました！！！！

これで、告ってハッピーエンド、には、しませんよ
それじゃあ、ちよっとつまらないでしょう……

なので、何か入れたいと思います

と言ってもまだ、何も考えていないので、なんとも言えないんです
けどね……

では、では、次話もヨロシクお願いします！！

イジワル

2人は歩いていた

コナンが向かう場所へと

今はいい感じの雰囲気だ

イジワルな神様もいるものだ

そんないい感じの雰囲気壊された

あの「3人」に

コナン「…だつたんだよ！」

哀「へえ、以外ね」

2人は楽しく話していた

歩美 光彦 元太「あつ!!」

後ろから、聞き覚えのある声が聞こえる

その声が、だんだんと大きくなっていく

コナンと哀は はあゝ とため息をついてから後ろを振り向いた

歩美 「コナン君、哀ちゃん」

光彦 「2人でどこに行くんですか!」

元太 「ズルイぞ!俺たちも入れるよな!」

あの3人が、やってきたのだった

そのまま、興味津々と言うように話しに加わるうとしてくる

そして、そのまま2人について行こうともしていた

歩美は笑顔で 光彦はうらやましそうな顔で 元太はつれてい
かないとキレるぞ!とでも言うような顔をしている

コナン 「お、お前らなあ…」

哀 「ゴメンなさい。遊びに行くわけじゃないの。だから今日
は…」

哀の言葉を無視し、まだ諦めようとはしない

歩美 「えー!!歩美も行きたいよお、どこに行くかだけでも教
えてよ」

光彦 「そうですよ!!2人だけで……デ、デートみたいじゃな
いですか…」

コナン 哀 「デ、デート!」

2人の顔が少し赤くなる

元太 「ええええ!!お、お、お前ら……デ、デ、デ、デートだ
ったのか!」

コナン 「な、何言っただよ!」

コナン「えっ！？いいのかよ……じゃあ、いつにする？」

歩美 光彦 元太の3人はコナンと哀のことを、じつと見つめていた

そんな顔を見れば、思っていることなどすぐに想像できる

歩美は いいなあゝ哀ちゃん……歩美もコナン君とデートしたいよあ……

光彦は コナン君……いつのまに！！歩美ちゃんだっているくせに……

元太は コナ……ン あとで覚えとけよな……俺がこらしめてやるぜ……

と3人は思いながら見つめていた

コナン 「で、いつ？」

哀 「……もういいわ。この話しはなかったことにする。だからあなたに話すことはないわ」

コナン 「えっ！？ わ、分かった……」

哀 「さあ、あなた達ももう帰ったら、私達はデートなんかじゃ……ないんだから」

哀の顔は、寂しい顔をしていた

その顔で、ムリに笑顔を作って3人に言う

歩美 「うん……じゃあさ、これからみんなで博士ン家に行つて

みんなで遊ぼうよ」

光彦 元太「賛成!!」

3人は今までのことなど、スッカリ忘れたように笑顔で言う

哀 「さあ、ならはやく行きましょう」

哀の一言で5人は阿笠低に向かって歩いていく

ルンルン気分で……と言ってもそれは3人だけ

あとの2人……コナンと哀は暗かった

イジワル（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます

はい、こんな展開が待っていました！！

あゝあ、コナン君やつちやいましたね……

次回、コナンと哀の心を動かす新たな出来事が！？

ピンク色のハート

ここは、阿笠低

歩美 光彦 元太 哀 コナン の5人が集まっていた

3人は楽しそうに遊んでいる

遊んでいる物、それは博士が作ったゲーム

歩美 「元太君！交代してよお」

元太 「いいじゃんかよお、あと一回だからさあ」

光彦 「元太君…ルールは守らなくちゃいけないんですよ」

元太 「たくつ、分かったよ…」

3人が少し言い争っていたのは、ゲームの順番でのこと

2人分しかコントローラーがないからだ

光彦 「えっと…次は、コナン君です！」

コナンはソファアに座っていた

ただ、ボーっとしていた

光彦 「コナン君！コナン君！…！」

コナン 「えっ？なんだよ光彦」

光彦に耳元で言われ、耳をさすりながら嫌な顔をして答える

元太 「なんだよって、次はコナンの番だぞ」

歩美もしきりに首を縦に振っている

コナン 「ああ、悪い……俺はいいよ。お前らだけでやってろよ」

そう言っつてコナンは近くにあつた本を手にとつた

歩美 「えっ！？いいの？」

コナン 「ああ」

3人は不思議そうな顔で見つめていた

感じていた

いつものコナンと何かが違つと…

何か

何か、寂びそうな感じが伝わってくる

元太 「じ、じゃあ次は灰原だぞ」

哀はコーヒーを飲んでいた

どこか遠くを見ているようだった

光彦 「は、灰原さん？」

心配そうに、光彦は哀の顔を覗き込んだ

哀 「えっ？な、何？円谷君」

光彦 「い、いや…次は灰原さんの番なので…」

そう言って、光彦はゲームの画面を指差す

哀 「ゴメンなさい…私はいいわ。4人で楽しんで」

歩美 「えええ！！哀ちゃんもやらないの？！」

哀 「えっ？！」

哀は部屋の中を見回した

ソファーには、本を持ちながら眠っているコナンの姿があった

哀 「そう、江戸川君もやらないのね」

そう言くと、哀は近くにあった毛布をとり、コナンにかけた

江戸川君、あの時のお返しよ

歩美 「あー！コナン君寝てる…」

元太 「……なんだよ」

光彦 「まっしょうがないですね」

歩美 「うん……」

元太 「んじゃ、やろーぜ！ゲーム♪」

3人は再び、ゲームを楽しくやり始めた

哀は、そんな様子を見て クスツ と笑う

私も、あんなふうに笑いたい

江戸川君の隣で笑いたい

ずっと笑っていたい

「逃げてばっかじゃ…勝てないもん！絶対！」

忘れてた

この言葉

吉田さんが言ってくれたこの言葉

私今、逃げてるんだ

江戸川君から逃げているのね

逃げないって決めたのに……

逃げちゃった

逃げない

もう、逃げないよ

自分に誓う

私は

灰原哀は

江戸川君に……彼に、
気持ち伝えるまで

絶対

絶対に

逃げません

私には

私の心には

ピンク色の

彼へのハートがあるんだもの

ピンク色のハート（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます

とても、とても、嬉しいです

なんかこの話し、哀ちゃんの思いが激しいですね……………

好き　って思ったら、この恋は実らないでも、気持ちは伝える！と言っても、彼は私のことなんて何とも思っていない……………でも！！この気持ちは伝える。

って感じですよね……………

なんかいちいち場面が似ていてゴメンなさい。

一応まだまだ、初心者なんで…下手で

では、まだ続きます！！よろしく願いますネ　次話も、お楽しみに♪

クエスチョンマーク

キーン コーン カーン コーン

下校のチャイムが鳴り響く

いつも通り、少年探偵団の5人で帰り道を歩いていく

元太 「なあ、なあ、昨日のサッカー見たか!？」

光彦 「はい!ーもちろん見ました!東京スピリッツ、4連勝です
すね!」

歩美 「ほおーんと♪最後のヒデのシュート、かつこよかったな
あゝ」

元太 「だよなあゝ」

昨日の、サッカーの試合のことで盛り上がっていた

歩美 「ねえ、哀ちゃんとコナン君は見た？」

哀 「ええ、博士も1人で盛り上がっていたわ」

光彦 「コナン君も、見ましたよね?!」

コナンはどこか遠くを見ているような目して、ボーっと歩いていた

光彦 「コナン君？」

元太 「おい!コナン!!」

コナン 「えっ!？な、何？」

歩美 「どうしたの?コナン君。昨日から元気がないみたいだけ
ど…」

哀も、心配そうにコナンの顔を見ていた

光彦 「何かあったんですか？」

コナン 「べ、別になんにもねーよ」

歩美 「本当に？」

コナン 「ああ」

歩美 「あつ、じゃあ歩美達こっちだから…またね コナン君、哀ちゃん」

光彦 「また明日！灰原さん、コナン君、元気出して下さいね！」

元太 「じゃーなあー」

そう言つて、3人と別れコナンと哀の2人で歩いていく

2人とも、黙つたままだつた

コナンは、今もボーっとして歩いている

哀も、話したくても話せなかった

コナンの雰囲気がいつもととはまったく違う

目には輝きの色もない

そのまま何も放さずに別れ、お互いの家に帰っていった

コナン「ただいま」

コナンは探偵事務所のドアを開ける

蘭 「おかえり♪」

そんな満面笑顔の蘭とは正反対に、コナンは無表情のまま自分の部屋に向かっていった

蘭 「コナン…君？」

P M : 7 : 0 0

蘭 「コナン君、ご飯できたよ！」

コナン 「はい」

部屋には、おいしい香りがただよっている

今日の夕食は、「ハヤシライス」

コナン 「あれ？小五郎のおじさんは？」

蘭 「ああ、お父さん今日は、仕事で遅くなるみたい」

コナン 「ふうん」

コナンと蘭は、ハヤシライスを口に運びながら話していた

蘭が、あっ　　と思いついたように言った

蘭　「ねえ、コナン君」

コナン「……………」

蘭　「コナン君!!」

コナン「えっ!？」

蘭は、コナンの顔を心配そうに少し見つめてから話しはじめた

蘭　「コナン君ってさ、好きな人……………いるでしょ」

コナン「!？」

コナンは、のどにつまりそうになり、急いで口の中に水を流し込んだ

蘭　「アハハッ　　凶星ね」

コナン「そ、そんなことないよ」

蘭　「お相手は、哀ちゃんかな」

コナン「!？」

コナンは水をふきだしそうになったのを、必死にこらえた

コナン「ンハァ……………そ、そんなじゃないよ!」

蘭　「見てれば、分かるよ　恋の相談なら私にまかせてっ」

コナン（まかせてっって……………んな恋の経験ねーだろ）

やはり、コナンは鈍い

蘭 「で、好きなんですよ」

コナン「だ、だからそんなんじゃないってば!!」

蘭は、ニツと笑い楽しそうにしゃべりだした

蘭 「告白してみたら♪」

コナン「え!？」

蘭 「自分の気持ちは、伝えなくちゃ。後悔しても知らないよ!

私は、伝えたくても伝えられないんだから……コナン君がうらやましいよ」

コナン「蘭姉ちゃん……」

後悔

後悔はしたくない

自分の気持ちは伝えたい

あの時の、あの言葉は忘れよう

自分でつい口走っただけ

あれは嘘

自分の気持ちじゃない

本当の自分の気持ち

俺は

灰原哀のことが

好き………？

クエスチョンマーク（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます♪

今回ののは、どうだったでしょう？？

書いている自分でも、なんだか良く分からなくなってきました……

…ハハハ……

ではここで、なぜ夕食が「カレー」ではなく「ハヤシライス」かと言うつと……

ただたんに、作者の私が「ハヤシライス」が好きなのです♪つて

……こんなことどうでもいいですね……

では、次回もよろしく願います

とうとう、クライマックスに近づいてまいりましたあ

ハーモニー

コナンは、今日は満面の笑顔からはじまった

コナン「おはよう、蘭姉ちゃん」

蘭「おはよう、コナン君。もう朝ご飯できてるから、食べちゃって」

コナン「はい」

そう言っただけでさつさと食事をすませると、学校へと向かって歩いていった

今日は、コナンには思いがあつた

灰原を誘う

今日の帰り、話があるから土曜日は空いてるか？って……

そう思いながら、コナンはルンルンで歩いていった

哀「んー」

哀は、ベットから起き背伸びをした

そのままベットからでて、顔を洗ったり服に着替えたりする

今日、江戸川君の様子を見て話す

話しがあるから、今週の土曜日は空いてる？って……

でも、彼のことを自分で励ましたほうがいいかもしれない

私は彼に、よく励ましてもらった

その、恩返し

彼には、笑っていてほしいんだもの

哀 「行つて来ます」

博士 「いつてらっしゃい」

博士にお見送りされ、哀は阿笠邸を出る

向かう先は、「学校」

今日は木曜日

今日行つて、明日行つたら学校は休み

その土曜日に、哀はコナンを誘おうとしている

いつにもまして、ルンルンで学校に向かつていく

こんな哀は、なかなか見れない

そんなんで、学校につく

11B

教室のドアをゆっくりと開け、中へはいつていく

そうすると、あの 元気な声が聞こえてくる

歩美 「あつ！おはよう哀ちゃん」

光彦 「おはようございます」

元太 「よう」

コナン 「おはよう」

哀 「おはよ……え！？」

コナンは、笑顔で哀に挨拶をしてきた

歩美 「今日のコナン君、元気いっぱいだよ」

光彦 「本当ですよーありますです」

コナン 「別にいいじゃねーか」

元太 「灰原、なんとかしろよ」

哀はクスツと笑い、コナンに向けて言った

哀 「私はそんなあなたが、一番好きよ」

哀は、頬少し赤く染まらせながら言った

コナン 「へ？」

光彦 元太 歩美 「ええええええ!!」

哀 「????」

歩美 「哀ちゃんやっぱり……」

光彦 「コナン君のこと……」

歩美 光彦 元太 「好きだったんだ!!??」

哀 「えっ!？」

哀は、歩美 光彦 元太の声に負けず、大きな声を出した

コナン 「え……灰原？」

哀 「なっ…そ、そんなこと……」

哀は、嘘をつこうとした

「そんなことない」と

でも、もう嘘をつきたくない

自分にも、みんなにも

でも、ここで言うのは恥ずかしい

コナンには、土曜日に言う決めてある

そう思い、哀はごまかした

哀 「さあ、どうかしらね？」

歩美 「えー！！！！またその反応！？」

光彦 「灰原さん……」

元太 「嘘か本当か分かんねーじゃんかよお！」

コナン 「あははッ」

哀 「クスクスッ」

哀とコナンは、そんな歩美 光彦 元太の反応を見て笑い出した

元太 「な、何笑ってんだよ！」

コナン 「別に、なんでもねーよ」

哀 「江戸川君と同じよ」

コナン 哀 「アハハハハハッ」

コナンは良いとして、いつも「クスクスッ」としか笑わなかった哀
さえも「アハハハッ」と笑っている

コナンはそんな哀を見つめた

哀 「えっ！？何？」

コナン 「えっ……いやぁ悪い。なんかオメエ、変わったなっと思っ
て」

哀 「そ、そう？」

歩美 「歩美もそう思う！」

元太 「俺も！」

光彦 「僕もです！！」

歩美 光彦 元太 の3人も話し加わってくる

コナン 「灰原、良く笑顔になるようになったよな」

歩美 「うん！良く笑顔でいる それに、今は」

光彦 元太 「アハハハッって笑ってた！（ました！）」

哀 「そう？」

歩美 「うん♪」

そう言つて、みんなの顔には自然と笑顔になっていた

もちろん、哀の顔も

キーン コーン カーン コーン

日直 「さようなら」

生徒 「さようなら」

小林先生 「みんなあゝ気をつけて帰ってネ」

生徒 「はあゝい」

生徒は、みんな帰っていく

その中に、もちろんコナン達も含まれている

笑顔でみんな歩いていく

楽しそうに話しながら

歩美 「それじゃあ、またね」

光彦 「また、明日」

元太 「まったなあ」

3人は手を振ってくる

コナンと哀も手を振り返し答える

哀 「ええ、またネ」

コナン 「また、明日な！」

そう言っで別れた

今歩いているこの道には、哀とコナンの2人しかいない

哀 「ねえ」

コナン 「なあ」

2人が言っしたのは、ほぼ同時だった

コナン 「わ、悪い…何？」

哀 「いいわよ。あなたからで」

コナン 「い、いいよ。別にたいしたことじゃねーし…」

コナンも哀も思っぢやいないだろう

2人とも、同じことを言おうとしていたなんて

哀 「あつー！じゃあ、せーので言ってみない？」

コナン 「ああ、別にいいぜ」

2人とも、顔を見合わせ頬はりんご色になっていた

コナン 哀 「せーのっ」

「今週の土曜日、空いてる??」

綺麗にはもった

そのまま、ずっと顔を見合わせていた

きよとん とした顔で

同時に2人は思った

考えてること、同じだった

ハーモニー（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます!!

コナン君と哀ちゃん、はもっちゃいました

なんか、もう大人の2人なのに子供っぽいですね…スネマセン。

まあでも、許してくださいネ

さあ次回、とうとう告白?それとも!?

キラキラ

窓からは、太陽の光が差しこんでいた

1人の少年は、ベットから起き さっさとしたくをすませて、下へ降りていった

コナン 「おはよう」蘭姉ちゃん」

蘭 「あっ！おはようコナン君。今日はご機嫌なのね」

コナン 「えっ！？べ、別にいつもと変わんないよ」

蘭 「そう？」

そう言いながら、蘭はテーブルの上においしそうな臭いをさせながら料理をおいていく

コナン 「いただきますーす」

蘭 「いただきます」

小五郎 「ふあ……」

小五郎はあくびを一つつき、テレビをつけた

「「沖野ヨーコの4分クッキング」」

テレビでは、沖野ヨーコの4分クッキングがやっていた

小五郎 「おっ！ヨーコちゃん」

蘭 「お父さん！」

小五郎はテレビにくぎつけで、蘭の言葉なんか聞いちゃいない

蘭 「もぉ……」

コナンは、苦笑いを顔に浮かべていた

そんなこんなで、朝のひとときは終わった

今の時刻は、AM：11：15

コナンは、かばんを持ってドアまで駆け寄る

コナン 「じゃあ、博士ン家に行くネ」

蘭 「はい。いつてらっしゃい」

今日は土曜日

あの、約束の土曜日だった

A M : 1 1 : 3 0 にコナンは、阿笠低に行くことになっていた

コナンは余裕を持って、探偵事務所を出た

軽く、スキップをしながら

ピンポーン

A M : 1 1 : 2 5

阿笠低に、インターホンが鳴り響いた

博士 「ん？誰かのお？」

博士が玄関に行こうとするのを阻止し、哀は博士よりも先に玄関に向かった

博士 「あ、哀君？」

哀 「きつと、彼よ」

博士 「??」

玄関までついた哀は、ドアをゆっくりと開けた

コナン 「よお！灰原。約束通り来てやったぜ」

哀 「クスッ ごくろう様。今バックとか持ってくるから待ってて」

哀は、急いでバックを取りに戻って行った

哀 「博士、じゃあ行ってくるわね」

博士 「あ、ああ。いつてらっしゃい」

誰のことだか分からずに博士は哀を見送った

哀 「おまたせ」

コナン 「んじゃ、行くとするか」

そう言って、2人は阿笠低を出て行った

博士 「……………！！ああ、新一か！」

今頃、気づいたようだ

哀 「で、あの場所ってどこなのよ」

コナン 「だから、ついてからの楽しみだって言ってるんだろ！」

そう、2人はこの前コナンが哀を連れて行こうとした、「あの」場所に行くつもりだった

でも、その前に近くのお店で昼食をとる

2人は、ファミレスの前についた

名前は、「スマイリー」と言う とても可愛い名前で、哀は気に入っていた

そこに、2人は入っていった

店員 「いらっしやいませ」

そう言って席に案内され、そこに座る

コナン 「んじゃ、何にする？」

哀 「そうね……」

メニューは、普通のメニューと お子様ようメニューが置かれていた

哀とコナンは少し苦笑いをして、普通のメニューを取った

メニューを見ていると、男の店員が水を運んできた

今から水をテーブルに置く と言うところで、その店員は足を滑らせたのか分からないが、体勢を崩して水をテーブルの上にこぼしてしまった

店員 「も、申し訳ございません！！今、タオルを持ってきました」
コナン 哀「は、はい」

哀はクスツと笑って言った

哀 「私がいつかこう言うところで働くとしたら、水をこぼさないように気をつけなきゃ」

コナン 「ああ、だな。それに、あの人研修中みたいだよ」

哀 「えっ！？どうした分かるの？」

コナン 「バッジに研修中ってシールが貼ってあっただけだよ」

哀 「あらそう……」

哀はなんだと言う顔をして、またメニューに目を通した

それとほぼ同時にさっきの店員がタオルを持ってやってきた

店員 「本当に、申し訳ございませんでした……」

そう言いながら、店員はていねいにタオルでテーブルを拭いていく

拭き終わったところで一息つき

店員 「申し訳ございませんでした」

と謝った

コナン 哀 「いえ」

店員は、カウンターのほうへと歩いていった

カチャ

コナンと哀の近くで、何かが落ちる音がした

哀は、落ちたものところまで駆け寄り、それを手に取る

ここの店の店員のバッチのようだった

哀はため息をつき、コナンに見せる

哀 「これ、さっきの店員さんのバッジよ……」

コナン 「本当だ……」

バッジには、写真と、名前「大竹 賢悟」と研修中のシールが貼られていた

コナンと哀は、それをレジに持って行く

コナン 「あの、これ落し物なんだけど……」

レジの店員 「あっ！ 本当……大竹さんのだわ。 ありがとう、あなた達」

コナンと哀は、レジの店員に笑顔を見せると、自分達が座っていたところに戻っていった

そして、楽しく昼食を取る

昼食中、2人の顔から笑顔が消えることは無かった

ずうーと　　ずうーと

顔には、キラキラと輝くスマイルがあった

コナン　「よし、そろそろ行くか！」
哀　　「ええ、そうね」

コナンと哀は、席を離れレジのほうへと向かった

レジには、さっきの女の店員ではなく、水をこぼしたうえにバツジまで落としていった店員、大竹さんがいた

店員　「あつ君達、さっきは本当にゴメンね」
哀　　「別に気にしてないわ。人間失敗することだってあるもの」
店員　「は、はあ」

店員は、哀の見た目からして大人びた口調に驚いていたが、すぐにお会計をはじめた

店員 「えっと、2800円になります」

コナン 「じゃあ、俺が払ってやるよ」

哀 「そんなのダメよ。金額もちょっと良いんだから……割勘で」

コナン 「あつ、そう」

そんな哀の一言で、コナンと哀は1400円ずつ払い、ファミレスを出た

哀 「んー…楽しかったわ。料理もおいしかったし」

コナン 「本当だな」はじめは水をこぼされたけどな」

哀 「まあ、あれはあれでいいんじゃない？」

コナン 「ああ、そうだな」

2人の心はハッピー色にそまっていた

2人はデート気分だった

そのこと「デート」のことを思う度に、コナンと哀は頬をりんご色にさせていた

2人はどこか、似ているのかもしれない

今の2人の顔は、キラキラと輝く太陽よりも、はるかにキラキラと輝いていた

キラキラ（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます♪ ω
今回ののは、どうだったでしょうか？

分かりづらいところがありましたら、ゴメンなさい。もっと、分かりやすく努力します！！

では、今回登場したファミレス「スマイリー」これは、コナンのマンガなど中で実際には、ありません
作者が勝手に作ったもので……

ではここで次に起こる。。。解決のポイント
別に、ポイントではないかもしれませんが、名前を覚えておくと良いですよ
ではっ ^^

2人のパワー

哀 「ねえ」

コナン「ん？」

哀とコナンは、ある場所へと向かって歩いていった

哀 「あなたが言うある場所って、あとどのくらいでつくの？」

コナン「んー……今の時間は2時18分だから……」

コナンは時計型麻醉銃に目をやった

コナン「あと10分くらいでついちまうけど……」

哀 「あら、本当！？いつまで歩かされるのかと思ったわ」

コナン「ハハハ……でも、ちょっと寄り道してこうぜ」

哀 「寄り道？いいじゃないこのままある場所に行っても」

コナン「時間がちよつとな……今の時間でも綺麗だけど夜のほうが……あつ」

コナンは一瞬冷や汗をかいた

哀 「綺麗？綺麗な場所なのね。ふうーん、しかも夜のほうが綺麗ってわけネ」

コナン「べ、別にそんなんじゃないよー!!」

哀 「バレバレよ」

コナンは「綺麗」と言う言葉を隠そうとしたが、やはりムリだった

コナンははぁーとため息をつく

コナンは思っていた

これじゃあ、あんま驚いてくれねえな……あー俺としたことが

ガクツとコナンは肩を落とした

哀 「そんなにショック??ただ綺麗って言葉が分かってしまっただよ。まだあなたが言うある場所は分からないわ」

コナン「だよなっ!!」

さっきまで落ち込んでいたはずのコナン……立ち直りがはよい
と言っかはやすぎる

哀は苦笑いをしながらコナンを見た

コナン「ん?」

コナンは、哀の横に見える建物に目をやった

それにつられて、哀もその建物に目をやる

ここは、8階建てのホテルで結構知っている人は多かった

そんなホテルの前に、パトカーがずらりとならんでいる
刑事の人達も、数人ちらばっていた

そんな中に、高木刑事も含まれていた

コナンと哀が高木刑事を見つけたのはほぼ同時だった

そして、お互いに顔を見合わせ

コナン 哀「高木刑事！」

コナン 哀「あっ……………」

お互い顔を見合わせたまま、頬をりんご色に染めた

これではもったのは2度目

やはり、気が合うのだろう…

2人はちょっと笑いながら高木刑事のほうへ走った

そして声をそろえて元気に言う

コナン 哀「高木刑事♪」

高木 「わわ！！なんだ、君達かぁ」

高木はドハデに驚いた自分にため息をついた

コナン「このホテルで何かあったの？」

高木「うん、ちよつとね。でも、ここは警察の仕事！君達には教えられないよ」

哀「あら、何か協力できることがあるかもしれないわ。被害者の人を知っているとかあるかも知れないわよ」

コナン「灰原もそう言ってることだから、ねっ高木刑事♪」

コナンと哀のアピールがはじまった

哀の一言で高木は納得したらしく、名前だけ教えてきた

高木「しょうがないなあゝ名前だけだからね」

コナン「はい！」

哀「クスッ」

高木は2度目のため息をついてから、話しはじめた

コナンはニヤニヤとした表情を見せ、哀はクスクスと笑っていた

今にもアハハハッと笑いそうに

高木「被害者の名前は「三沢 絵美」犯人の名前は「大竹 賢悟」

」

コナン 哀「大竹 賢悟！！！！？？？」

コナンと哀は目を大きく見開いた

コナンのニヤけた顔も、哀の笑いも一瞬で吹っ飛んでしまった

高木 「ん？知り合いかい？」

コナン 「いや、知り合いじゃないんだけど……」

哀 「今日のお昼頃、私と江戸川君で「スマイリー」って言うファミレスで昼食をとっていたんだけど、その中の店員でいたのよ、大竹 賢悟って言う人が！」

高木は、2人が犯人を見たと言うことよりも、小学一年生の2人だけでファミレスに行ったほうに驚いていたようだったが、我に返ってコナンと哀のほうを見た

高木 「それは本当かい？」

コナン 「うん！本当だよ」

哀 「さあ、これで事件の内容を聞かせてくれるわよね」

3人の間に少し沈黙が続いた

コナンと哀はずっと高木のことを見つめていた

まるで、本当の小学一年生のように

高木 「ああゝもお、分かったよ！！君達には負けたよ」

そう言つて、高木は事件の内容を話してくれた

その事件の内容は、こうだった ← ← ←

ホテルの101号室の前で、その大竹賢悟と言う男が三沢絵美と言う女性を睡眠薬で眠らせ、誘拐した。

犯人（大竹）は101号室に入り、今でも閉じこもったままだと言うしかも、その現場を目撃したカップルがいた

名前は、女のほう「茜崎 桜」 男のほう「近藤 祐次」

その2人が、警察に連絡をした

だが、犯人にその現場を見られたらしく、その2人も誘拐し101号室に立てこもってしまって、出て来る様子はないようだった

ドアをブチャぶろうと警察がしていたが、ドアの前にホウキやらタンスやら重い物をたくさん置いていて、入ろうにも入れないらしいそこで警察は今、ドアを開けるためにドアを取り壊す道具がくるのを待っているところだそうだ

なぜ、犯人達の名前が分かったかと言うと、犯人が電話をしてきてそうとう自信があったのか、自分の名前・被害者の名前・警察に通報した2人の名前もしゃべっていたそうだ

これが、高木の説明だった

高木 「と言うことなんだ」

高木は三度目のため息をついた

コナン「ふーん。なら、もう犯人が捕まるのも同然だね」

コナン「何があつたの？高木刑事」

高木「えっ、ああ…ドアの取り壊しに成功して、中に入ったそう
なんだけど……中には被害者の女性「三沢 絵美」しかいなかったらしいんだ……」

哀「えっ！？窓の鍵とかは？」

高木「もちろん、しまっていたみたいだよ」

哀は驚いた表情を見せるが、コナンの目はキラキラと輝いていた

コナン「高木刑事！僕達もそこに連れて行ってよ！犯人のこと、ちよっと知ってるからさ」

高木「ああ〜でも……」

高木は少しは役に立つかもしれないと踏んで、コナンと哀も連れて行くことにした

コナンと哀と高木は走って101号室のまで行く

ついたころには、三人とも息を切らしていた

目暮「おお高木君！やっと来たか…ってん？コナン君達じゃないか！高木君、関係のない人は…」

高木「いえ、実はこの2人は犯人のことを知っているようだ…」

高木は目暮を納得させ、コナンと哀も捜査に加わることになった
被害者の女性は、眠らされたままでいたので隣の部屋のベッドで監視付きで寝ているようだ

それから1・2分たって、隣の部屋から監視をしていた刑事と被害者の女性が出てきた

目暮 「おお、目が覚めたか。事件の時のことをくわしく教えてくれんかね」

三沢（被害者） 「はい、分かりました」

コナンと哀も良く聞こうと三沢に近づいた

まわりに他の刑事がコナンと哀の横に来て、コナンと哀は少し押されコナンと哀の体はピタッとくっついていた

2人は少し照れながらも、三沢の話を聞いた

三沢の話では、

廊下を歩いていたところ、101号室の前で何者かにハンカチで口を塞がれ、そのまま睡魔が襲ってきて眠ってしまったと言う

それで、今さっきベットで起きたらしい

三沢 「と言うことなんです…」

目暮 「ほお…そうでしたか」

目暮は顔をしかめた

そのとたん、三沢が大声をだした

三沢 「はやくその犯人を捕まえて下さい！！密室の中で逃げ出すなんて不可能ですけど、警察の方ならきつとトリックも解けて、犯人を捕まえられます！！お願いします」

目暮 「は、はい！もちろん」

目暮は、少し動揺しながらも女性の言葉を受け入れた

コナンと哀は頭をフル回転させた

2人のパワーがあれば、体は小さくても事件だって解決することができる

そんなパワーを持つ2人

お互いに気持ちを寄せ合う2人

コナンは哀に耳打ちをする

コナンと哀の目が輝きはじめた

頬もりんご色に染めながら

2人のパワー（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます

なんだが事件ばかりでゴメンなさい（書いてある内容が）

コ×哀少なかったですね……

でも、大丈夫です！！クライマックスと言うものもあるので、お楽しみ♪

事件の話しにさせていただきます、結構あの。。。に気がついた人はいると思います　なんとも、簡単な事件ですので……………TωT

では、まだまだ「哀LOVEストーリー」は続きます♪

どうぞ最後まで、よろしくお願いいたします
ω

白い箱

タッタッタッ

哀は、ホテルの廊下を駆け抜ける

一直線に向かった先は、「三沢 絵美」の元

哀 「ねえ、お姉さん♪」

哀は、久しぶりに一年生のような可愛い声をだす

三沢 「ん？どうしたの??」

哀 「ちよつとこつち、来て!!」

哀は三沢の服をひっぱった

三沢は分からずに哀に連れてかれる

相手は一年生

自分を ハメようだなんて思っているとは思えない

哀は、近くの部屋に三沢をいれた

哀 「じゃあ、あそこのソファーに座ってて」

三沢 「はい、はい」

三沢は、哀のことを可愛いなと思いながらソファーまで向かっていく
そのとたんに、哀はさつと部屋の鍵をかけた

そして、三沢が座っているソファーの前にあるテーブルに、白い箱を置く

三沢 「ん？お嬢ちゃん。この箱は何？」

三沢は箱を指差して言った

哀 「えっ！？ああ…そ、それは…ヒミツ！」

三沢 「そう、分かったわ」

哀は今始めて、一年生で良かったと思った瞬間だった

哀 「じゃあ、そこでちょっと待っててネ」

哀はドアのほうほ向かっていった

三沢 「分かったヨ」

それから、30秒程たった頃

大竹 「どうだ、上手くいったか？」

三沢 「えっ！？お、大竹さん？」

この声は確かに大竹の声だったけど……これはコナンが変声機を使って大竹の声で話していた

そんな様子を、哀はそっと見守っていた

大竹 「犯行はどうだった？」

三沢は、声かせ聞こえるのに姿が見えないことを不審に思ったが、スラスラと話しはじめた

三沢 「はい、犯行はバッチリです！！警察は後で気づくと思いますけど、あの部屋にある高価な品もちゃんと私が持ってるわよ」

大竹 「そうか、これで後は警察がひくのを待つだけだな」

三沢 「ええ、本当だわ！！警察の前で堂々と言いたいもんよ！私も犯人等の仲間だったのよ！

それに、残りの3人は浅岡倉庫に隠れているってね……アハハハハッ」

三沢の笑い声は部屋中に響く

コナン「そうだね、それを警察に教えてあげようか」

三沢 「えっ！？」

コナンは物陰から出てきて、三沢の前にたった

コナン「やっぱり、あんたも共犯だったんだな。バレバレだよ」

そう言いながらコナンは白い箱をそっと取り、玄関側に投げつける

三沢は白い箱を目で追う

その先に見えたのは……哀だった

哀は白い箱をしっかりとキャッチする

哀 「あとはまかせたわよ！江戸川君」

コナン「ああ」

三沢は目を大きく見開いていた

三沢 「さ、さっきと口調が大人びて……」

哀 「お気の毒に、三沢絵美さん」

そう言って、哀は部屋からでていった

哀が向かう先は、目暮達のところ

あの箱には録音テープがしかけられていた

目暮達はその録音テープを聞き、大慌てで部屋に向かって走っていく

哀はクスツと笑い、そのあとを追いかけた

三沢 「ま、まさかハメたわね！」

コナン 「ああ、きつと今頃灰原が警察に証拠のテープを持ってい

って、警察とここに向かっているだろうな」

三沢はポケットに手を入れる

銀色の物をにぎりこっちに向ける

「「「「「ナイフ」「」「」」」」」

三沢 「さあぼうや、殺されなくなかったらこっちに来なさい」

コナンはびくりともせずに、キック力増強シューズのスイッチを入れる

それと同時に、警察も中にはいっていく

目暮 「三沢絵美！逮捕する！！」

三沢はコナンのほうへと走る

コナンを人質にとろうって逃げようって寸法だろう

哀はクスクス笑っていた

高木 「あっ！コナン君」

高木は三沢を止めようとしたが、高木の行動よりもコナンの行動の

ほうがはやかった

コナンはボールを取り出すとボールを思いっきり蹴り上げる

そのボールは三沢に直撃し、その場に倒れた

警察は一瞬あつけにとられていたが、我に返り三沢を逮捕した

他の刑事が、残りの3人がいる浅岡倉庫に向かい無事逮捕されたと
言う

コナンと哀は事情調取(?)を受け、それからコナンの言うある場
所に向かっていた

時間はもう5時をまわっていた

哀 「さすがね、江戸川君。でもどうしてあの人が犯人だって
分かったの？」

コナン 「えっ？あぁ、三沢って人、捕まってから警察が来るまで
ずっと寝ていたって言うてたろ。警察もまだ三沢に部屋の中が密室
だなんて言うていない。だから分かったんだよ！あの人はきつと共
犯だってね」

コナンは得意げに話した

哀 「なるほどね。そうすれば残りの3人は窓から逃げ、残っ
た三沢さんが指紋をつけないように手袋なんかをして窓の鍵をし
めるのね」

コナン 「その通り」

哀 「そう」

哀はコナンに笑顔を見せる

つられてコナンも笑顔になった

辺りはもう暗くなってきた

そんな中、コナンはあるビルの前で立ち止まった

哀 「???どうしたの？」

コナン 「ここだよ。俺が言ってたあの場所は」

哀 「ここが？」

コナン 「ああ、このビルの屋上がな」

哀 「屋上…」

コナンと哀は同時に顔を上に上げる

同時に顔を上げたことには、2人とも気が付いていた

2人の顔は、りんご色だった

哀はドキドキしていた

ついに、この時が来た……と

私、灰原哀は今日

この屋上で彼に告白することを誓います

大丈夫

ちゃんと言える

この気持ち

ちゃんと彼に、伝えてきます

白い箱（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！！！！！！！！！！

!!!!!!!!!!!!!!

これで、事件は終わりです♪

さあ、いよいよクライマックスに近づいてまいりました

うん。次の話しは作者が一番書きたかったところなんですねぇ。

はやく書きたいです！！^ω^

では、まだあと少し続きますので、よろしく願いしますネ
哀ちゃん、告白できるのか！！？？

お楽しみに♪

ありがとう

タン タン タン タン

屋上へと向かう階段を、一段一段ゆっくり上がっていく

タン

最後の一段を上がりきる

目の前には、一つの扉がある

コナンは、何も言わずにゆっくりと扉を開ける

その瞬間に広がる世界

コナンと哀は扉の外へと歩いていく

柔らかな風が流れ、空には点々と星が散らばっている

屋上の下を眺めると、家やお店の明かりが点々と光、星のように見える

哀 「キレイ……」

哀は空を見上げる

コナン「だろっ！俺のお気に入り場所なんだ」

コナンも空を見上げる

哀 「そう……」

コナン「この場所に人を連れて来たの、灰原が初めてだよ」

哀 「そう……嬉しい」

哀はドキドキして、なかなか言葉が出てこない

伝えなくちゃ

この気持ちを彼に

私は約束したもの

今日、彼に告白する...って

好き

こんな、たった2言の言葉だけど

その言葉を思っただけで、ドキドキが止まらない

頬が赤くなっているような感じがする

ちよつと、恥はずかしい

でも、大丈夫

「逃げてばつかじゃ…勝てないもん！絶対！！」

大丈夫

もう、逃げないって

決めたもの

言える

ちゃんと彼に伝えられる

元黒の組織の一員で

私のせいで小さくなってしまったけれど

危険な目にあわせてしまったけれど

そんな私の気持ち

受けとめてください

あなたには、ありがとう
の言葉がいっぱいある

勇気をくれてありがとう

励ましてくれてありがとう

助けてくれてありがとう

笑顔をくれてありがとう

守ってくれてありがとう

ありがとう

哀 「江戸川君」

コナン「ん？」

コナンは、哀のほうを見る

そのたびに哀はドキドキが止まらなくなった

どんどん頬が赤くなっていく

風や空気もその雰囲気をとらえたのか、柔らかく、優しく流れていく

哀 「私、灰原哀からあなたに大切お話しがあります」

コナンは何も言わずに、笑顔を見せた

言うよ

言うよ

彼に気持ち

伝えるよ

哀 「私、江戸川君のことが……好きです」

ありがとう（後書き）

読んでくださった方、本当にありがとうございます♪

哀ちゃん、告白しちゃいましたね。コナン君の返事は一体！？

ゴメンなさいね、こんなところで区切っちゃいまして……

区切りたくなっちゃうんですねえ！これが！！！！

今日か明日、続きを更新いたします

もうすぐでこのストーリーも終わりですが、どうぞ宜しくお願いしますネ

しずく

沈黙が続く

風や空気は今も、柔らかに優しく流れていた

哀は頬をりんご色にりんご色をたしたように、真っ赤かに染まっていた

コナンは目を大きく開いていて、頬をりんご色に染めていた

嘘……………???

いや、本当だよな

今、灰原が言った言葉

俺をからかってるんじゃないよな

なら、俺も……

コナン 「俺……」

哀 「別にいいのよ」

コナン 「え??？」

哀は、外の景色に顔を向けていった

哀 「分かってるもの。あなたは蘭さんのことが好きだって……」

…でも、この気持ちは伝えたかったただけだから」

コナン 「いや、俺は……」

哀 「振っていいわよ、私のこと。気をつかわなくてもいいわよ…ゴメンなさいね。困らせちゃって」

哀は、今にも泣きそうな顔をしていた

コナン 「だから…」

哀 「江戸川君、私は」

コナン 「聞けよ……!」

哀 「えっ!？」

コナンは、思いっきりどなった

哀は、目を大きく開いた

コナンは呼吸を整えると、深呼吸を一回した

コナン 「困っちゃいねーよ」

コナンの口調は、優しくふんわりとしていて、コナンの顔はとても優しい顔をしていた

そんな顔を哀に向け、哀の目をしっかりと見た

コナン 「ごめん、灰原」

哀の類には、
一粒のしずくが流れた

しずく（後書き）

読んでくださった方、本当にありがとうございます♪

読者数も2000人を超えることができました！！

感謝してます。ありがとうございます " ω "

今回ののは、ちょっと短かったですね。しかも、コナン君が、ああああああ、あんなことを言うなんてっ！！

こんな作者をお許し下さい。まあでも、次回で新展開です♪
どうぞ、次回もヨロシクお願いいたします。

スター

しずくは、静かに下に落ちた

この結果は分かっていたこと

だから、悲しくなんかないはずよ…

なのに

なのに、涙があふれだす

また、彼を困らせちゃうじゃない…

コナン 「灰原」

哀は、恥ずかしながらもコナンの目を見た

コナン 「今の言葉は、俺が工藤新一 としての答えだよ」

哀 「??」

哀は、意味が分からなかった

でも、その答えはすぐに見つかったむ

コナン 「工藤新一として、俺は蘭のことが……好きだ」

哀 「……………」

哀は、何もいわずにコナンの目を見続けていた

コナン 「江戸川コナンとして。灰原に告白の返事をするよ」

さっきと同じ顔

柔らかくて、優しくて

でも、さっきとは少し違う

どこかに、笑顔が入っていて嬉しさが入っているような、そんな顔をしていた

コナン 「俺、江戸川コナンは……」

ゴクンと哀は唾を飲み込んだ

ドキドキ

ドキドキ

哀の胸はドキドキしっぱなしだった

それは、彼 江戸川コナンも同じだった

コナンは深呼吸をして、自分を落ち着かせたようだった

コナン 「好きだよ 灰原のこと」

哀は、目がとびでてしまいうくらい、目を大きく開いた

哀 「い、今の本当?！」

コナン「ああ」

つい、自分の耳を疑ってしまっ

哀の頬をまた一粒、しずくが流れた

さっきの涙とは違う

これは、

嬉涙

と言っもの

哀は、笑った

笑顔になった

今までに見たことがない、最高の笑顔

コナンも笑う

最高の笑顔で

哀 「ありがとう。江戸川君」

コナン「こちらこそ」

哀とコナンは、屋上を出てビルの外に出た

外はもう真っ暗だった

そんな中を、哀とコナンは歩いていく

哀 「私ね」

コナン 「ん？」

哀は、コナンの目を見た

哀 「もしあなたが工藤新一に戻って、蘭さんのところへ行くつて言うんなら、私も元に戻って蘭さんのライバルになるわよ」

コナン 「フッ……したら俺はどうすりゃいいんだよ……2人の女に囲まれて」

哀 「それは、あなたの気持ち次第なんだから。ちゃんと決めなさいよ」

コナン 「はい、はい」

自然と、顔には笑顔が浮かぶ

コナン 「さっさ、暗いしはやく帰ろうぜ!」

哀 「あっ……………」

コナンは、哀の手とった

コナンはその手を、しっかりと握っている

哀も、その手をしっかりと握った

コナンと哀の顔は、真っ赤なりんご色に染まっていた

その手と手を、2人はずっと離さずに歩いていった

顔に浮かんでいる笑顔も、ずっと続いていた

空に点々と光る星たちも

コナンと哀を祝福するように、
いちだんと輝いていた

スター（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます
今回ののは、どうでしたか？

なあゝんか、作者的には微妙です……

でも、結構満足はしていますけどネ

はい、次話でとうとう完結です！！

残り一話ですので、どうか最後まで宜しくお願い致します
♪

エピソード

私は今、幸せです

ものすごく、幸せです

彼との今までの、思い出を思い出す

すると、自然と顔に笑顔が浮かんできます

彼に助けられたこと

守られたこと

しゃべったこと

遊びに行ったこと

事件を解決したこと

告白をしたこと

私の手と彼の手が、つながったこと

他にも、言い切れないくらいたくさんある

そんな彼との思い出は、私の最高の思い出です

江戸川君には、いつもすごく感謝している

私はちゃんと、恩返しするよ

楽しみにしていて下さい

江戸川君

約束、ちゃんと守りましたよ

彼に気持ち、伝えましたよ

予想外な答えも返ってきましたよ

私はとても幸せです

きつとこれから、色んなことがあると思う

でも、彼と一緒にならきつと乗り越えられる気がします

きつと、乗り越えられる

私は、彼のことを

信じてる

だから、大丈夫

信じていれば、大丈夫

彼も、私のことを信じてくれている

ありがとう、江戸川君

大好きですよ

エピローグ（後書き）

読んでくださった皆様、最後までお読み頂きまして………ありがとうございます
うございます！！！！（＾○＾）ノ

とても、とても感謝しております♪（ ）

作者はコ×哀が大好きで、「哀の初恋」も「哀 LOVE ストーリー」も作者的には、とても気に入っている作品なんですネ

なので、ぜひまた「続編」を書きたいなあ〜と思っております
！！¥（＾○＾）ノ♪♪♪¥（＾○＾）ノ

なので、「続編」はこんなのがいい！などなど、感想&意見を頂けると、とても嬉しいです。

最後まで読んでいただいて、本当にありがとうございました！！！

（●＾○＾●）

「続編」のほう、楽しみ（？）にしていして下さいネ（＾ー・）

-

作者のはっぴでした。

（人・ω・）°*°*°* （・ω・人）（人・ω・）°*°

°*° （・ω・人）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0811b/>

哀 LOVE ストーリー

2010年10月10日13時34分発行